２０２５年度 事業計画書

はじめに

故・渡邉暁雄が創設者となって設立された日本フィルハーモニー交響楽団は２０２６年６月に創立７０周年を迎えます。長年にわたり楽団を支えてくれた多くの皆さまのご恩に報い、次の１００周年に向けて良き伝統を守り、時代の変化にしなやかに対応しながら、更なる飛躍を遂げて参ります。

「芸術性の追求」は、楽団のもっとも重要な目標であり、このポリシーは今後も変わることなく、２０２５年度も首席指揮者カーチュン・ウォンを中心に、クラシック音楽の持つ豊かな感性や文化的多様性の表現等を通じて、極上の音楽をお届けいたします。

もう一つの大切な目標である「社会性活動」については、長年取り組んできた「被災地の音楽を」の活動を核に、社会貢献のさらなる深化を目指し、社会の公益に役立つ独自のオーケストラ像を実現して参ります。

プレ７０周年に当たる２０２５年度には、ファンの皆さまを大いに魅了する演奏会をいくつも用意して、来るべき７０周年記念につながる特色のある１年にしたいと思います。

例えば、４月に２日間に亘り開催するマエストロ広上淳一によるセミ・ステージ形式のオペラ「仮面舞踏会」は、日本フィルのオペラの歴史に新たな１ページを刻む画期的な演奏会になります。また６月の東京定期演奏会にはハンガリー出身の巨匠ガボール・タカ―チ＝ナジが登場し、モーツアルトの交響曲を指揮します。

次に、２０２５年度は、翌年の７０周年記念の年から実施する２つの制度改定の移行に向けた暫定的な期間になります。

その１つは、公演の開始時期の変更です。現行では９月をスタートの時期にしておりますが、２０２６年度からは４月に変更し、財団の決算期と公演開催のスタート時期を統一いたします。

もう一つは、横浜定期演奏会の開演時間を従来の１７時から２時間繰り上げて１５時に変更いたします。

コロナ後の人々の生活様式の変化や嗜好の多様化、また新しい価値観の醸成

等を踏まえ、土曜日の開演時間を早めることで、会員の皆さまがもっと来やすくなるとともに、演奏会終演後もゆとりを持った過ごし方ができるのではないかと思っております。

言葉よりも強い力を持つ音楽の力を信じて、これからも社会貢献活動を推進し、多くの人々の心に癒しと生きる活力をお届けすることが我々オーケストラに課せられた大切な使命であると考えております。

７０周年という記念の年を見据えて、２０２５年度も日本フィルは皆さまに最高レベルの音楽をお届けするとともに、課せられた社会的使命をしっかり自覚して一層頑張って参ります。

Ⅰ．２０２５年度　経営目標

１．７０周年記念につなげるためのプレ周年事業の活性化

来年の創立７０周年は「芸術性と社会性」を兼ね備えた日本フィルの特色を前面に打ち出し、音楽芸術文化団体を率先垂範していく姿を内外に示していきたい。

そのためにも、２０２５年度から、長年温かいご支援をいただいている多くのファンの皆様に心からの感謝の気持ちを伝える機会を設けるとともに、従来、縁の無かった皆様にも日本フィルのあらゆる活動に目を向けてもらえる出会いを提供し、これらを通じて７０周年の盛り上がりにつなげていきたい。

２．あくなき芸術性の追求

２０２５年度も、卓越した演奏力と魅力溢れる良質な演奏会を通して、芸術性の追求を目指し、「日本フィルらしさ」を明確に表現しながら、多くのお客様に満足感を得ていただけるように努力していく。

首席指揮者就任３年目を迎えるカーチュン・ウォンとの多彩なプログラミングと聴衆を引きつける演奏力は内外から極めて高い評価を得ている。引き続き、カーチュン×日本フィルの魅力を最大限に発信し、マエストロの持つ無限な可能性を引き出して、さらなる魅力アップに努めていく。

２０２５年度から新しい試みとして、フレンド・オブ・ＪＰＯ広上淳一と組

んで、広上淳一×日本フィルの「オペラの旅」の演奏会を実施する。

本格的なオペラ公演の実施は、日本フィルの演奏力の質と幅をさらに広げることにもなり、合わせてクラシック音楽界の次世代を担う若い人材の発掘にもつながるものと考えている。

また、名誉桂冠指揮者小林研一郎をはじめ、前正指揮者山田和樹など内外の著名なマエストロとの多くの共演を通して、より優れた芸術作品を数多くお届けしていく。

さらに、長期的視野で芸術性の追求に取り組み、若手アーティストの発掘や、他ジャンルへのアプローチなどを通じて、日本フィルに新たなファン層を呼び寄せるための取り組みも進めていく。

３．社会性活動のさらなる深化

今年度で５０年を迎えた３世代のファミリー層を対象にした「夏休みコンサート」や、多くのボランティアの支えを軸に地域の音楽芸術文化の普及活動に貢献し、同じく５０年を迎えた「九州公演」、さらには、東日本大震災の発生直後から沿岸の被災地等で１４年間実施してきた音楽を通じた心の復興支援活動など、日本フィルの社会性活動は一段の深化を見せている。

日本フィルは、２０２３年５月に岩手県との間で結んだ「文化芸術振興連携協定」に続いて、昨年７月には福島県とも「包括連携協定」を結んだ。

特に福島県では、避難指示解除地域の双葉町や南相馬市などへの「地域復興支援活動」を積極的に行い、また地域の生徒を対象にした「学校部活支援活動」についても、例えば、会津若松市内１３の学校の生徒たちへの楽器指導などを行ってきた。

こうした日本フィルが長年使命としてきた社会性活動は着実に深化をとげているが、今後もこうした活動を積極的に取り組んでいく。

この他、癌研有明病院と協働した「がん患者さんと歌う第九演奏会」や、杉並区の「６０才からの楽器教室」、また「耳で聴かない音楽会」から始まり、現在も継続実施している「落合陽一×日本フィルプロジェクト」は、２０２５年度は大阪万国博覧会でも演奏会を行う予定で、これら社会性の高い活動は２０２５年度もしっかりと推進していく。

２０２３年に上廣倫理財団から受けた「新たなオーケストラ支援事業助成活動」最終年度の２０２５年度は、２０１１年から継続する「被災地に音楽を」から発展した「東北の夢プロジェクト」を、震災から１５年目の２０２６年に、

震災の悲劇を風化させないことや他地域との交流を図る目的で、現地の子供たちを東京に招いて演奏会を開催する計画である。

４．財政基盤の健全化

楽団の財政については、コロナ禍が主原因で定期会員数が大幅に減少し、会費収入が４年間にわたり大幅に逸失していること、受託公演数の大幅減少、物価の急上昇、過度な円安の進行、会場費など諸経費の大幅高騰等で、引き続き、経費面では厳しい状況に置かれている。

２０２５年度は７０周年記念事業を梃子に、定期会員数の増強・回復を図り、会費収入を増やす。

また企業や学校、ホール、自治体等に対する新規受託や協賛を推進し、演奏料収入の拡大を図る。また誰もが親しめる魅力あるプログラムを増やして来場者率のアップを図り、入場収入の増加を目指す。

一方で、膨れた事業費や管理費については、演奏力低下への影響を抑えつつ、無駄な支出の削減に務めることで、財政バランスの改善に少しでもつなげる。

Ⅱ．２０２４年度財政見通し(現時点)と２０２５年度の財政計画

１．２０２４年度 財政の実績見込み

ポストコロナの２０２４年度の演奏会収入は、公演ごとにばらつきはあるものの、来場者数は回復の兆候を示し、前年に比べると入場料収入は上向いてきた。しかしながら、長年の課題である定期会員の回復が遅々として進まず、コロナ期間中に生じた大幅な逸失収入を未だ戻せない状況にある。

また受託等の演奏料収入は、受託先ホールの改修時期に当たり受託を失う等苦戦を強いられた。またコロナ前に比べて学校や企業等の受託が進まず、演奏収入は大幅な減収となった。

前年度に一気に膨れた諸経費は、昨今の物価高騰や過度な円安等が影響し、減らすことは適わなかったものの、ほぼ前年並みの経費に抑えることができた。ただ結果として、基礎収支の改善は進まず、経営課題を先送りにした格好になった。然しながら、国や民間助成金、また個人や法人の寄附金等は着実に増えて、現時点の最終損益は前年の大幅赤字からの改善が見込まれる。

２．２０２５年度 財政計画

２０２５年度は、上記の通り、７０周年記念につながる魅力ある演奏会の企画等を企画し、演奏収入はかなり増える見込みだが、一方で、外国人指揮者の招聘、オペラ公演など事業費の嵩張る演奏会もあり、また７０周年記念事業の準備経費や人件費増を中心に管理費の増加もあり、前期比大幅な経費増は免れ得ないものと見込んでいる。

その対策として、定期会員増強による会費収入の増加、新規受託先の獲得、法人協賛や広告協賛の強化、法人特別会員の新規獲得、更に「７０周年事業」に焦点を絞った周年記念寄附金の個人・法人等からの幅広い獲得を目指し、これら施策の実現によって増加した費用を賄い、収支均衡を目指す計画である。

Ⅲ．２０２５年度　事業計画

１．オーケストラ・コンサート

（1）プレ７０周年事業の一環として特色ある演奏会を実施

プレ７０周年に当たる２０２５年度には、７０周年につながる魅了ある演奏会をいくつも用意して、特色のある１年にしたい。

首席指揮者カーチュン・ウォンとは、マーラー、ショスタコーヴィチ、伊福部昭、芥川也寸志といった彼ならではの特色あるプログラムがラインナップされた。マーラー作品についてはこれまで５番、４番、３番、９番、２番を演奏してきたが、今回は第６番《悲劇的》に取り組む。マーラーが最も充実していた時期の傑作であり、その分オーケストラに求められる技術・表現の難易度も高い。これまで指揮者とオーケストラ相互に培ってきた実績をもとに、名演が期待される。またショスタコーヴィチは交響曲第１１番《１９０５年》をとりあげる。この作品は現桂冠指揮者アレクサンドル・ラザレフが日本フィルに初登場した時の（そして後の首席指揮者就任への大きな布石となった）日本フィルにとって非常に所縁の深い作品であり、それを現首席のウォンと取り組む点が大きな注目ポイントである。他にもインドネシアのガムランに焦点を当てたブリテンの「パゴダの王子」（５月東京定期）や伊福部、芥川といったアジア作品への眼差しも引き続き注がれる。

また日本フィルの今後を占うもう一つの大きなプロジェクトとして４月のセミ・ステージ形式オペラ「仮面舞踏会」が挙げられる。「セミ・ステージ形式」ながら本格的な衣装や照明、ダンス等を伴う演出（演出担当：高島勲氏）がついた日本フィルのオペラの歴史に新たな１ページを刻む画期的な演奏会である。

また同じ４月には、昨年の演奏会で好評を博したドイツ人マエストロ、アレクサンダー・リープライヒが再登場し、６月にはハンガリーの巨匠、ガボール・タカ―チ＝ナジが初めて日本フィルで指揮する演奏会など、話題を集める魅力溢れた演奏会が目白押しである。

プレ７０周年の２０２５年度から、長年に亘り日本フィルを温かくご支援いただいた多くの方々に心からの感謝の気持ちを伝えるコミュニケーションの場を提供しながら、７０周年記念事業の本格実施につなげていく。

（２）あくなく芸術性の追求

高い演奏力と積極的なプログラミングによって、ミュージックペンクラブが「２１世紀の日本のオーケストラが目指すべき方向を明確に示す」と評価し、音楽賞を日本フィルに授与したこと（2023 年）が象徴するように、このところの日本フィルの演奏会はファンから高い支持を受けている。引き続き、「芸術性の追究」という主軸はぶれることなく活動を行っていく。

そしてその中心となるのは、やはり首席指揮者カーチュン・ウォンである。今や日本フィルの「看板商品」ともいえるマーラー作品の演奏は今後も継続してゆく（２０２６年６月の特別演奏会では、そのクライマックスとも言える「交響曲第８番《千人の交響曲》」の演奏も控えている）。またウォンのもう一つのライフワークである「アジア」をテーマとした作品演奏にも、引き続き、取り組んでゆく。

日本フィルはこの若き首席指揮者のもと結集し、他のオーケストラとは一線を画す、唯一無二の存在となるべく努力してゆく。既にその実績は着実に積み重ねられており、聴衆からの支持も日を追うごとに高くなってきている今こそ、この流れをより一層大きく飛躍させることが我々の大きな責務である。

定期演奏会以外の自主公演においては、クラシックの普及も意識し、より幅広い層にお楽しみいただける公演づくりに努めている。

桂冠名誉指揮者小林研一郎との「コバケン・ワールド」、「コバケン・ワールド in KYOTO」、「第九特別演奏会」、「名曲コンサート」、「芸劇シリーズ」等を

通じて、プロフェッショナルのオーケストラとして担うべき大きな役割の一つである 「クラシック音楽の普及」 にもしっかりと取り組んでいく。

５０年を超えた伝統の「夏休みコンサート」では、第２部をバレエにした演奏会（共演：スターダンサーズ・バレエ団）と、ピアノをメインに据えた演奏会（共演：金子三勇士氏）の２つの内容を制作、ロビーでのウェルカム・コンサートや、終演後のサイン会、懇談会といったイベントも実施予定である。

また同じく５０年を迎え、長年にわたり九州全県で継続されている九州公演は、地元の皆さまと心を分かち合いつつ、また地方自治体や企業の支援を得るための努力も重ねて、これからも地方の音楽文化の灯をともし続けてゆきたい。

（３）企業・自治体等との連携によるコミュニケーションの創出と支援開拓

ローム株式会社およびローム・ミュージック・ファンデーションとは良好な関係を続けており、東京・京都でのコバケン・ワールド、また京都での夏休みコンサート、小学生からのクラシック・コンサートの継続開催、大人から子供まで幅広い聴衆に音楽の楽しさを伝えていく。

宇部市での UBE 株式会社の全面的な支援協賛のもと、市の後援によって開催している「UBE クラシックコンサート」では、コンサート以外にも病院を訪問する演奏や子供たちへの楽器指導も行い、地域の音楽文化醸成を長年継続し、２０２５年度は１８回目の公演を迎える。

その他にも数多くの企業よりオーケストラ公演への協賛を受けている。

自治体連携としては、「東北の夢プロジェクト」を通じて、岩手県・福島県と連携協定を締結しており、地域内の様々な文化芸術や子供たちへの教育活動において協働を行っていく。

また九州公演では、２０２２年度に締結した大牟田市との「音楽を通した魅力あふれるまちづくり推進協定」に沿って文化教育事業を進め、子どもたちの公演への招待のほか、アウトリーチ活動等を進めていく。

芸術性活動への支援はもとより、社会性活動への理解と協力連携が強まることで、より多くの地域自治体と企業との連携が増加して相乗効果を生んでいる。

２．エデュケーション・プログラム、リージョナル・アクティビティ

社会性活動の中核である「エデュケーション・プログラム」と「リージョナル・アクティビティ」は、日本フィルの長年の歴史に裏打ちされおり、多彩なプログラムが楽団の大きな個性であり強みとなっている。こうした強みを活かし、近年より一層この活動への期待と評価が高まっている。

（1）エデュケーション・プログラム

昨年度、記念すべき５０年目を迎えた楽団のメイン事業である「夏休みコンサート」は、バレエとピアノの多彩な共演者を迎えた本格的なオーケストラ公演で、３世代が一緒に手軽に楽しめる人気企画として定着し、今年も首都圏で１７公演、また京都での公演も予定している。

杉並区での「春休みオーケストラ」、京都での「小学生からのクラシック・コンサート」は、毎年、指揮者や司会者とオリジナル台本を作成し、子供たちにわかりやすい芸術的体験を提供している。今年はいずれも新たな指揮者を迎えてフレッシュな内容を提供する。

（2）ワークショップ

他の楽団にはあまり見られない特徴のある取り組みとして、日本フィルは長年に亘り、音楽づくり等の要素を含むワークショップを開催してきた。

定期演奏会のプログラムを様々な角度から知ってもらい、作品の理解と楽しみをより深める「オケのテイキは面白い」は好評を博しており、今年度も継続実施する。合わせて今年度からは、楽員が主導によるワークショップにも力を入れる。

（3）地域での活動

◆ 杉並区：自治体との協働をさらに進める

長年、杉並区とは、本拠地である「杉並公会堂」をはじめ、様々な事業で連携を行っている。「セシオン杉並」、「西荻地域センター」といった区内地域施設との良好な関係を持ち、杉並区ならではの地域に密着した取り組みを実施する。

区内の学校や施設を訪問する「杉並出張コンサート」、「区役所ロビーコンサート」、「公開リハーサル」のほか、「２０歳の集い」、「敬老会」といった多数の区のイベントで生演奏を提供。さらに「セシオン杉並」、「西荻地域センター」とは「６０歳からの楽器教室」を共催するほか、室内楽のコンサートも数多く

開催する。

◆ 九州、宇部、その他地域での継続的取組み

昨年度５０年を迎えた九州公演は、５１年目という新たなステージへと入る。長年にわたってツアーを支えてきた各地の実行委員会は、高齢化などの課題を抱えた地域も少なくないが、行政との連携や、世代交代を通じた活性化などに鋭意取り組みながら、今後も継続実施をしていく。

山口県宇部市や、岩手県、福島県でも企業や自治体との連携を背景に事業を継続していく。

◆ 室内楽を通した活動

室内楽を通じた活動は、小編成による演奏で音楽を間近に感じるだけでなく、奏者自身の言葉で音楽の楽しみ方を知り、演奏家の魅力に触れる日本フィルのアウトリーチを通じて、多くの人たちとの交流や、様々な経験を共有してきた。

杉並区、埼玉県での多数のアウトリーチのほか、九州公演や夏休みコンサートでは開演前のロビー演奏を通じてコンサートへの期待感を高め、企業イベントや学校等、様々なシチュエーションでクラシック音楽の良さと日本フィルの楽団員の魅力を届けてきた。

３.「被災地に音楽を」並びに「東北の夢プロジェクト」（被災地での音楽活動）

東日本大震災から１４年目、そして年度末には１５年の節目を迎える。この間、ほとんどの文化芸術による復興支援活動が終了したとされているが、日本フィルは変わり続ける地域の現状、課題、ニーズを丁寧に掬い上げながら３５０回を超えた活動を継続。２０１９年に開始し、更なる復興の後押しを目指して子供たちの音楽文化活動を応援する「東北の夢プロジェクト」を２０２５年には岩手県盛岡市、福島県いわき市で開催。オーケストラ公演の共演団体として、沿岸・内陸から子供たちの団体を招いている。

近年は各地の人口減少、少子高齢化、文化的格差、学校の統廃合による部活動の縮小といった諸問題が明らかになり、これらに対する息の長い活動を実施するために、自治体や地域の団体（報道機関、金融、企業、芸術団体等）との連携を強化、実行委員会の形成に着手した。

その成果として、２０２３年５月には岩手県との「文化芸術振興連携協定」、

そして２０２４年７月には福島県と「包括連携協定」を締結し、地域の様々な課題に迅速・的確に対応、震災復興や文化振興、音楽教育の推進等を図ることを目的とし、加えて福島県からは魅力発信への協力が要請されている。

岩手県では、陸前高田市を訪問し、現地の自治体と連携して地域の魅力向上（楽しい陸前高田）と、新たに流入している若い住民と古くからの住民の交流の機会を作っていく。

福島県では、原発事故による避難指示が解除された双葉町で息の長いコミュニティづくりへの協力を行い、南相馬市や田村市では音楽部活動の支援を通じて子供たちと地域の活性化に努めている。部活動の地域移行問題への取り組みとして、会津若松市の吹奏楽アカデミーの指導を行っている。

他にも宮城県石巻市を訪問。震災１５年の節目に３県の震災関連施設である伝承館を備えた地域を訪問するという意義深い活動を行っている。

また２０２５年度は震災１５年を期して、初めて「東北の夢プロジェクト」を東京で開催し、東北の子どもたちの活動を多くの人に紹介するほか、東北の情報・魅力発信の機会としても活用する。また過去の共演団体の上演を収録した映像をアーカイブとして発表するため映像の再編集や、多言語対応などを進める。また東北沿岸をオーケストラで訪問する「明日へ響け、オーケストラ」を釜石市で開催。地元の合唱団、民謡歌手などとも共演する。

これらの活動には「新たなオーケストラ支援事業（上廣倫理財団出資助成）」を活用し、日本フィルの社会性を象徴する事業としてさらなる充実を目指していく。

４．演奏コンテンツの活用：映像、音源、配信を活用した新たな事業展開

コロナ禍において拡大した公演のライブ、アーカイブ配信は、オーケストラおよびクラシック業界においては、一般的にライブ体験の代替としての収益が見込めず、取組みが減少している。しかし一方で、映像、音源、配信に関する事業については、新たなオンライン技術等の向上により、その可能性が広がっている。

日本フィルは有料の映像配信、音源配信、ライブビューイングなどをこの間に実施してきているが、「「ライブ（リアル）とアーカイブのベストミックス」により、新たな事業の可能性を、引き続き、追求する。

楽団の商用レーベル「JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA RECORDINGS」では、２０２４年度、CD３点、配信２タイトルを新規リリースした。引き続き、「７０周年を見据えた歴史的音源の発掘紹介」、「日本フィルの今の演奏水準を伝える実演」、「日本人作曲家の作品紹介」を主軸方針とし、事業を活発化していく。

コロナ禍より継続中の「メンバーズ TVU チャンネル」での配信は、映像アーカイブの二次活用による映像を通じたオーケストラの魅力発信を推進していく。

なお、コンテンツ活用においては、引き続き、下記の基本方針をもとに、諸権利の確保、維持につとめる。

① 実演の原盤権は楽団が所持し、二次使用を促進していく
② 実演家の権利を守り、隣接権は積極的に行使していく
③ 実演家との契約関係について、必要な見直しや契約の強化を進める

５．社会の変化に対する音楽団体の関わり

（テクノロジーを活用した社会的発信－「落合陽一×日本フィルプロジェクト」
（オーケストラ音楽をより多くの方に伝える新たな取り組み）

落合陽一氏と共に、テクノロジーの活用によってより多くの方へオーケストラ音楽を届ける新たな事業を、２０１８年以来毎年実施している。
２０２５年度は、「日本博 2.0」助成公演のほか、大阪・関西万博協会主催によるシグネチャーイベントとしてプロジェクトが出演する。「日本文化探訪」企画の第３弾は「能楽」をテーマに新作初演を行う等、引き続き、テクノロジーを活用した未来創造的事業を継続、発信する。

Ⅳ　別紙【事業計画】

オーケストラ・コンサート　主催公演各事業の計画

● 東京定期演奏会（サントリーホール、金曜日/土曜日２回公演）

２０２６年に創立７０周年を迎える日本フィルは、２０２５年９月以降を「プレ７０周年」と位置付け、過去と未来という双方への眼差しを軸にプログラムを企画した。また７０周年にあたる２０２６年から４月を定期演奏会の期初とすることにしたため、今回のみ２０２５年９月から２０２６年３月という普段より期間の短い「シーズン」が生まれることとなった。

いずれにせよ２０２５年度も首席指揮者カーチュン・ウォンを軸に、小林研一郎、広上淳一、山田和樹といった東京定期の「常連組」も登場しつつ、既に幾度も共演を重ね強い信頼関係で結びついたアレクサンダー・リープライヒや下野竜也といった面々にもユニークなプログラムと共に指揮代へ登壇してもらうことになる。また今回はウォンの強い敬意を込めた薦めもあり、ハンガリーの巨匠ガボール・タカーチ＝ナジが初客演をする。また円安の傾向の厳しい中ではあるが、ヴァイオリンのブラッハー、ピアノのハフ、チェロのペレーニといった世界的なアーティストの招聘も行う。併せて東京音楽大学や日本フィル若手奏者をソリストとして登用するなど、一人のスーパースターなどに頼ることなく、ヴェテラン勢と次世代を担う音楽家をバランスよく並べることができた。

プログラムとしてはハイドン、モーツァルトからはじまり、ウォンのライフワークであるマーラー、そして２０世紀のブラッハーや芥川、武満、２１世紀のサイに至るまで、日本フィルならではの実に幅広い時代と地域を網羅したラインナップとした。

	No.	出演	プログラム
4月	769	指揮：アレクサンダー・リープライヒ ヴァイオリン：コリヤ・ブラッハー	ハイドン：交響曲第 79 番 ボリス・ブラッハー：ヴァイオリン協奏曲 アイブス：答えのない質問 Ｒ．シュトラウス：交響詩《ツァラトゥストラはかく語りき》
5月	770	指揮：カーチュン・ウォン （首席指揮者）	芥川也寸志：エローラ交響曲 ブリテン：バレエ音楽《パゴダの王子》組曲

		ピアノ：スティーブン・ハフ	ブラームス：ピアノ協奏曲第 1 番
6 月	771	指揮：ガボール・タカーチ＝ナジ チェロ：ミクローシュ・ペリーニ	ドヴォルジャーク：チェロ協奏曲 ブラームス：ハイドンの主題による変奏曲 モーツァルト：交響曲第 41 番《ジュピター》
7 月	772	指揮：広上淳一（フレンド・オブ・JP0） バスクラリネット：フランス・ムソー 合唱：東京音楽大学	佐藤聰明：バスクラリネット協奏曲 ホルスト：組曲《惑星》
9 月	773	指揮：カーチュン・ウォン （首席指揮者）	ブルックナー：交響曲第 6 番《悲劇的》
10 月	774	指揮：カーチュン・ウォン（首席指揮者） トランペット：オッタビアーノ・クリストーフォリ ピアノ：小川典子	ショスタコーヴィチ：ピアノ協奏曲第 1 番 ショスタコーヴィチ：交響曲第 11 番
11 月	775	指揮：小林研一郎（桂冠名誉指揮者） ヴァイオリン：千葉清加 ヴィオラ：安達真理	モーツァルト：協奏交響曲 シベリウス：交響曲第 2 番
12 月	776	指揮：山田和樹 ソプラノ：熊木夕茉　バリトン：加耒徹 合唱：東京音楽大学	武満徹：My way of life ラヴェル：ボレロ プーランク：スターバト・マーテル
1 月	777	指揮：広上淳一（フレンド・オブ・JPO） チェロカミーユ・トマ	ファジル・サイ・チェロ協奏曲《Never give up》 ショスタコーヴィチ：交響曲第 15 番
3 月	778	指揮：下野竜也 ピアノ：野田清隆	ムーサ：エリジウム ナイマン：ピアノ協奏曲 シベリウス：交響曲第 6 番

● 横浜定期演奏会（横浜みなとみらいホール、各回土曜日）

プロフェッショナル・オーケストラで初めて横浜で定期演奏会を始めたのは日本フィル。１９７３年から始まった横浜定期も２０２３年で５０周年を迎え、２０２４年９月には４００回を数えた。２０２５年度のラインナップも横浜を重要なホームグラウンドの１つに定め、演奏会を開き続けてきた日本フィルならではの内容と言えるだろう（なお、１９９８年に「みなとみらいホール」が開館して以降、この場所で一番数多くオーケストラの定期演奏会を開催してきたのも日本フィルである）。親しみやすく楽しい企画が特徴の横浜定期演奏会、今シーズンも華やかな顔ぶれを並べ、今をときめくアーティストたちの個性あふれる輝きを、古今東西、愛される名曲でお楽しみいただく。ピアノの横山幸雄、ヴァイオリンのヴィルフリート・和樹・ヘーデンボルクそれぞれの「弾き

振り」が披露されたり、首席指揮者カーチュン・ウォンの一筋縄ではいかない「名曲」プログラムであったりとユニークな内容が今年の特徴である。またウォンの力強いレコメンドで実現したハンガリーの巨匠ガボール・タカーチ＝ナジの日本フィル初登場には我々自身も大きな期待を寄せている。一方で、毎年恒例の１２月の第九公演や、日本でも人気の高いウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートに倣った年明けの華やかなワルツ集など、いわゆる「ライト・リスナー」にも優しい曲目も並んでいる。原則的には、東京定期演奏会に比べて親しみのある作品を並べ、しかし、その中でも芸術性追求の精神は忘れることなく、横浜の地の芸術文化向上を意図して今年度も企画を行った。

	No.	出演	プログラム
4 月	406	指揮・ピアノ：横山幸雄（弾き振り）	ショパン：ポーランドの歌による幻想曲 ショパン：演奏会用ロンド《クラコヴィアク》ヘ長調　op.14 ショパン：ピアノ協奏曲第 1 番(通常版)
5 月	407	指揮：ガボール・タカーチ＝ナジ ピアノ：　三浦謙司	シューベルト：交響曲第 7 番《未完成》 モーツァルト：ピアノ協奏曲第 21 番 コダーイ：《ハーリ・ヤーノシュ》組曲
6 月	408	指揮：小林研一郎（桂冠名誉指揮者） ヴァイオリン：千葉清加	モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第 3 番 マーラー：交響曲第 1 番《巨人》
7 月	409	指揮：原田慶太楼 ピアノ：阪田知樹	ラフマニノフ：ヴォカリーズ《管弦楽版》 ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲 ラフマニノフ：交響曲第 2 番
9 月	410	指揮：カーチュン・ウォン（首席指揮者） ピアノ：髙木竜馬	伊福部昭：SF 交響ファンタジー第 1 番 ラヴェル：ピアノ協奏曲 ドヴォルジャーク：交響曲第 9 番《新世界より》
10 月	411	指揮：藤岡幸夫 トロンボーン：伊藤雄太（首席）	吉松隆：アトム・ハーツ・クラブ組曲第 1 番 吉松隆：トロンボーン協奏曲《オリオン・マシーン》 シベリウス：交響曲第 1 番
11 月	412	指揮：太田弦 ピアノ：牛田智大	ショパン：ピアノ協奏曲第 2 番 チャイコフスキー：交響曲第 5 番
12 月	413	指揮：出口大地 ソプラノ：砂田愛梨 メゾ・ソプラノ：山下裕賀 テノール：石井基幾 バリトン：高橋宏典 合唱：未定	ベートーヴェン：交響曲第 9 番《合唱》 他
1 月	414	指揮・ヴァイオリン： ヴィルフリート・和樹・ヘーデンボルク	ベートーヴェン：《献堂式》序曲 モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第 3 番

			ヨーゼフ・シュトラウス：我が人生は愛と喜び J. シュトラウスⅡ世：アンネン・ポルカ J. シュトラウスⅡ世：浮気心 J. シュトラウスⅡ世：ウィーン気質 J. シュトラウスⅡ世：帝都はひとつ、ウィーンはひとつ J. シュトラウスⅡ世：芸術家の生涯
3 月	415	指揮：小林研一郎（桂冠名誉指揮者） クラリネット：伊藤寛隆	モーツァルト：クラリネット協奏曲 ベートーヴェン：交響曲第 3 番《英雄》

● 夏休みコンサート

多くの子供たちが、夏休みに家族とともに身近なホールで音楽に触れ、その情操を高めていくことを願い続けてきた夏休みコンサートは、昨年記念すべき５０年目を迎えた。料金は通常のコンサートに比べ廉価で設定（ただし大人料金については値上げを実施）し、聴衆層の拡大、特に未来のクラシック音楽ファンの育成につとめる。２０２５年度も一都三県１６回と京都１回、計１７回の主催公演、そして依頼公演としても１回出演、加えて「東北の夢プロジェクト」で本公演に準じた内容で２回開催する。

今年はチャイコフスキーのバレエ《白鳥の湖》と、ピアノをメインに据えた企画を第２部とする。

指揮／園田隆一郎、大井剛史　司会とうた／江原陽子

第２部の出演／スターダンサーズ・バレエ団、金子三勇士（ピアノ）

● その他の演奏会（首都圏）

幅広い聴衆育成とクラシック音楽の普及を目指し、多彩な公演事業を行う。

桂冠名誉指揮者小林研一郎氏との「コバケン・ワールド」「第九特別演奏会」は、たいへん人気を博すシリーズとして定着しており、日本フィルの特徴ともいえる公演として認知されている。この２シリーズを軸に、「名曲コンサート」、「芸劇シリーズ」、「特別演奏会」等でさらなるクラシック音楽の普及に取り組む。また、いわゆる音楽中間層に対する様々な施策にも取り組んでいく。

● その他の演奏会（首都圏以外）

１８回目となる宇部公演（宇部興産チャリティ・コンサート）は１０月１３日に開催。指揮は日本のヴェテラン指揮者梅田俊明氏が担当する。
また１１月３日には、５回目となる「コバケン・ワールド in KYOTO」を実施。（協賛：ローム株式会社、助成：ローム ミュージック ファンデーション）。

● 九州公演

５１年目を迎え九州公演は、２０２６年２月に、九州全７県で１０公演を行う見込み。指揮は日本フィルとも縁が深く、過去にも数度九州公演を共演した藤岡幸夫が務める。
本ツアーは地元実行委員会同士の固い連携と熱い信念に基づく働きかけによって実現されている。九州公演ならではの人と人との温かな交流を通じてより一層の感謝の意をあらわし、地域の文化振興に寄与するよう努めてゆきたい。

● その他の主な主催演奏会

最新テクノロジーとオーケストラとの融合という我が国でも画期的な「落合陽一×日本フィルハーモニー交響楽団プロジェクト」は、VOL.９公演を８月２１日にサントリーホールにて開催。また同月３０日には大阪・関西万博主催事業への出演を予定している。例年通り、クラウドファンディングによる資金調達（READYFOR）も実施予定。
杉並公会堂との共催で継続開催する「春休みオーケストラ探検」は、全館を利用し、２回のオーケストラ・コンサートの他、楽器体験やソロ・リレーコンサートなど多彩なプログラムをお楽しみいただく予定である。

● その他の主な共催事業

ホールとの連携による事業開催は、地元の杉並公会堂はもちろんのこと、サントリーホール、大宮ソニックシティ、府中の森芸術劇場、相模女子大学グリーンホールなどで引き続き積極的に継続していく。サントリーホールとの共催事業「とっておきアフタヌーン」は２０２３年度より「にじクラ」にブランド

リニューアルし、さらなる聴衆の裾野の拡大を目指しており、完売公演が続くほどの実績を積みつつある。